

# 学会ニュース

## 目次

・ 2018年度学会費納入のお願い	1
・ 第40回大会および第41回大会について	1
・ 国際18世紀学会エジンバラ大会について	2
・ 『啓蒙の百科事典（仮題）』出版について（長尾 伸一）	2
・ 【エッセー】 ケンペル研究の東西（岡野 薫）	3
・ 事務局より	5

## 2018年度学会費納入のお願い

代表幹事 小田部 胤久

学会ニュースの発送とあわせて、会費未納の方には、その年数に応じた金額を印字した払い込み用紙（未納分が3年を超える方は印字無し）を同封させていただいています。学会の活動は皆様の会費によって支えられています。事務局におきましても円滑な学会運営のため身を引き締め変わらず努力する所存ですが、会員の皆様にはどうか苦しい学会の財政事情をご理解いただき会費納入にご協力をお願い致します。

すでにご存じと思いますが、一般の銀行から郵便振替口座への入金もできるようになりました。

なお、口座番号は以下の通りです。

<郵便口座振替で振り込む場合>

口座記号番号：00800-7-183350 口座名称：日本18世紀学会事務局

<銀行等から振り込みする場合>

銀行名：ゆうちょ銀行 店名：〇八九店（ゼロハチキュウテン）

預金種目：当座預金 口座番号：0183350

## 第40回大会および第41回大会について

今年度の第40回大会は、2018年6月23日（土）、24日（日）の両日、京都大学で開かれ、盛会のうちに終了しました。開催校責任者の王寺賢太会員をはじめ、京都大学の方々に篤くお礼申し上げます。

共通論題「啓蒙のリミット—神話・文学・政治思想のはざままで」の発表者の方々、コンサートの出演者の方々にもお礼申し上げます。

来年度の第41回大会は、2019年6月8日（土）、9日（日）に中部大学で開かれる予定です。開催校責任者は玉田敦子会員です。詳細は追ってお知らせします。

## 国際18世紀学会エジンバラ大会について

国際18世紀学会第15回大会は、2019年7月14日（日）～19日（金）、エジンバラ大学（英国）にて開催されます。詳細につきましては以下の大会サイトをご覧ください。<http://www.bsecs.org.uk/isecs/>

本大会のテーマは‘Enlightenment Identities’/« Lumières et identités »です。ただし、自由論題・ラウンドテーブルとも、共通テーマとかかわりがなくとも構いません。

論題募集につきましては、日本18世紀学会ウェブサイトの詳細を記したPDFファイル（英語／仏語）がありますので、そちらをご参照ください。 [http://www.gakkai.ac/joq3pd3kf-1593/#\\_1593](http://www.gakkai.ac/joq3pd3kf-1593/#_1593)

自由論題・ラウンドテーブル等のメ切は2019年2月1日（金）です。この期日を過ぎてからの申し込みはできませんので、ご注意ください。

日本18世紀学会の会員は、国際18世紀学会に会員として登録されております。皆様ふるって御参加ください。

国際大会への参加費については、2018年8月22日から25日にかけてボルドーで開かれた国際18世紀学会幹事会において、暫定的に次のように定められました。

早期アプライ（～2019年5月1日まで登録。正規／非正規）：295ポンド／195ポンド

通常（正規／非正規）：350ポンド／250ポンド

1日のみ参加（正規／非正規）：175ポンド／125ポンド

「非正規」としたのは、貨幣価値の低い国からの参加者への優待価格ですが、主催者側は、この「非正規」の基準をとくにチェックすることはしない（各参加者の申告を信頼する）とのことでした。

### 日韓共同セッションについて

長尾 伸一

本学会では毎回の国際大会で、東アジアと啓蒙にかかわるテーマで韓国18世紀学会と共同セッションを開催してきました。本年も韓国学会との打ち合わせを進めており、現在のところ、韓国側から提案された以下のようなテーマで開催することになっています。ご報告いただける方は、本年末をめぐって事務局か長尾宛にあらかじめご連絡いただくと助かります。

“Asian Identities in the Global Enlightenment”

また今回は日本、韓国学会に並んで、新しく結成された東南アジア18世紀学会がおそらく共催者となり、中国からも中国人民大学清史研究所などの方々に参加する予定となっています。報告内容は、アジア自体での発展、東西の影響、ヨーロッパ啓蒙におけるアジアなど、上記のテーマにかかわるものなら何でも結構です。多くの会員の皆さんの参加をお待ちしております。なお詳細はまたお伝えします。

### 『啓蒙の百科事典（仮題）』出版について

長尾 伸一

今年の総会では啓蒙についての事典を編纂し、丸善出版から出版することが了承されました。フランス語や英語などでは類書がいくつかありますが、日本語では前例のない企画です。この機会に来年40周年を迎える本学会での研究成果をひろく普及させ、いっそうの発展のきっかけとできればと思います。

内容は中項目事典で、事典として使える上に、入門書として「読める事典」となることが出版社から要請されています。また日本での編集ですので、欧米での事典に加えて、アジアからの独自の視点も加えることも大切となってきます。体裁、価格等の出版社原案は、A5判・768p・上製・箱入・本体2万円～2万2000円程度・初版900～1000部程度、電子書籍（PDFタイプ）も製作、2021年6月をめどに出版、となっています。

現在幹事会で編集担当幹事5人（長尾伸一、小田部胤久、逸見龍生、武田将明、坂本貴志）を選任し、概要を検討しています。それが終わり次第、年末あたりから編集委員を10人ほど選任して編集作業に入り、詳細な内容を決定した後に、来年から項目の執筆をお願いする予定です。進行状況は随時お知らせいたしますので、できるだけ多くの方々に編集、項目執筆を通じて本企画にご参加いただき、文字通り学会全体の事業としていただければと思います。

## 【エッセー】

### ケンペル研究の東西

岡野 薫（沖縄国際大学）

#### 1. 研究会「ケンペルの協働研究」の開催

エンゲルベルト・ケンペル(1651-1716)の名前は日本でどれほど知られているだろうか。「鎖国という言葉が誕生するきっかけをつくったドイツ人です」という説明に納得する人も多いだろう。日本では鎖国と関連付けて彼が紹介されてきたためであろう。鎖国とケンペルとの関係は、すでに高等学校の日本史の教科書において言及される。こうして日本人の多くはその名前を教科書で初めて目にする。ケンペルの母国ドイツでも彼の名前は鎖国と結びついているのだろうか。

『新ドイツ人物事典』(1972)の冒頭で、ケンペルは「ペルシャならびに日本研究者」として紹介される。彼は日本というよりも広くアジア研究者として認識されているのである。本文においては、ペルシャ研究者としての側面が強調され、日本については僅かな記述があてられ、鎖国との関連に至っては言及すらされない。つまり、鎖国を前景とした日本でのケンペル像はドイツにおいて共有されていないのである。日本とドイツにおけるケンペル像の相違は、両国の研究者たちのケンペルに対する関心の相違に由来するだろう。そうだとすれば、相違の理由はどこにあるのだろうか。この問いは、漠然としたものだったが、私がケンペル研究を始めた頃から心にかかっていた。ある時、ケンペル研究者の渡邊直樹教授の仲介で、オルデンブルク大学にデートレフ・ハーバラント教授を訪ねる機会があった。ケンペルの伝記の著者、ケンペル著作集の編者の一人そしてケンペルに関する多数の論文で知られるドイツ人の研究者である。私の疑問をお話したところ、日本におけるケンペル研究史を調査したら面白いのではないか、というコメントとともに、日本とドイツにおける研究史をテーマとした研究会を開催してはどうか、という提案もいただいた。多くの歳月を要したが、この提案は「ケンペルの協働研究—長崎到着330年(2020)に先駆けて」と題した2018年3月10日の研究会へと具体化することとなった。研究会は「新たなケンペル像の構築」と題した渡邊直樹の趣旨説明に始まり、「日本におけるケンペル研究」という岡野の研究報告の後、ハーバラントの講演「ケンペル研究の歴史」で幕を閉じた。本稿では日本とドイツの研究史の相違に焦点を絞りつつ、この研究会の概略を報告したい。

趣旨説明において渡邊は、ケンペルの日本観察の特徴として「比較の視点」を重要視している。ケンペルは「ヨーロッパの基準あるいは自分個人の立場」のみならず、2年におよぶ日本滞在の成果として「日本の内側」から比較することができたという。比較の視点は、この「ケンペルの協働研究」という研究会の鍵となる概念でもあった。日本とドイツのケンペル研究史の比較を通じてケンペル像を新たに構築すること、その第一歩がこの研究会の意味であった。

#### 2. 日本におけるケンペル研究

研究報告「日本におけるケンペル研究」は、日本においてなぜケンペルと鎖国とが強調されるかという問題をその研究史をたどりながら考察した。日本のケンペル研究は、彼の日本への紹介すなわち翻訳、西欧を対象とした研究、日本を対象とした研究に大別できる。

19世紀から現在に至るまでケンペルの著述の抄訳ないし全訳は全12点に及ぶ。とりわけ蘭学者志筑忠雄による最初の翻訳(1801)は後世の影響という点で重要である。ケンペルの『廻国奇観』(1712)には長大なタイトルを冠した日本についての論文が収録され、これを志筑は「鎖国論」という表題で訳出した。その際の造語である鎖国は、後に江戸期を象徴する概念として人口に膾炙してゆく。志筑の翻訳もまた多数の読者を得る。それは当初、写本によって流布し、1850年以降現在まで5度復刻再版されている。ケンペルの翻訳の数々は日本人のケンペルへの関心の大きさのみならず、関心の中心に「鎖国論」があったことを示唆している。この点は次のケンペルについての研究でも確認できる。

西欧を対象とした研究でケンペルが扱われる場合、次の主題が繰り返し論じられた。つまり、鎖国は西欧でいかに評価されたのかという問題である。牧健二『西洋人の見た日本史』(1949)を嚆矢として、小堀桂一郎が『鎖国の思想』(1974)で鎖国をめぐるドイツの議論を考察し、これらに数多の研究

が続いた。なかでも中川久定の「日本の鎖国を前にしたケンペル、フランスの哲学者たち、およびカント」(2006)は思想史の観点からこの主題を論じた特筆すべき論文である。ケンペルと鎖国とは、このように日本人研究者の注目を集めてきたのであった。なぜだろうか。日本を対象とした研究から探ってみよう。

日本を対象とした研究でケンペルが扱われる場合、一方にはケンペルの日本における影響を扱う研究、他方には鎖国の概念を論ずる研究がある。本稿の論旨との関連でいまは後者に着目したい。「江戸期は国外と交流のない時代、すなわち、鎖国の時代である」。これは日本人にとって長い間、疑う余地がない「事実」であった。鎖国は、前近代性と結びつけられ否定的に評価され、時に独自の文化を形成する要因として肯定的に評価された。だが、板澤武雄が「鎖国及び『鎖国論』について」(1934)で、鎖国という言葉は志筑つまりケンペルに由来すると指摘して以後、鎖国という「事実」そのものが疑問視されるようになる。1970年代以降、日本の歴史学者たちは、それまでの鎖国概念の見直しを提唱してきた。江戸時代の日本は鎖された国ではなく、東アジアの国々と交流や外交を行っていたというのである。この見解は近年では一般にも認められるようになってきている。

ここまで日本におけるケンペル研究を簡潔にみてきたが、その全体の流れは次のようにまとめることができよう。鎖された国というケンペルの日本像は、18世紀の西欧において批判的に議論された。そして19世紀には志筑によって鎖国という日本語の名称を与えられて日本に輸入され、それは次第に日本人の自己認識となっていった。やがて鎖国の功罪が議論され、現代ではその概念が見直されつつある。つまり、鎖国を考えることは近代の日本人の自己認識や歴史を考えることである。だからこそ、日本人研究者はケンペルと鎖国とにこれほど心ひかれてきたのである。

### 3. ドイツにおけるケンペル研究

講演「ケンペル研究の歴史」においてハーバラントは、これまでの膨大なケンペル研究を時代ごとに分類し、それぞれに批評を加えている。本稿はその一部とくに彼が重視した研究を紹介しよう。ドイツのケンペル研究は18世紀に始まる。当初は遺稿の整理や本としての刊行が主であった。19世紀には著名な学者たちがケンペルを引用し、それによって彼の名声が高まる。20世紀には、従来の状況を一変させる研究者が登場する。カール・エルンスト・マイヤーである。ケンペルの未刊行の資料を調査し、彼はケンペル選集『アジア奇観』(1933)と伝記『ケンペル—ドイツ最初の研究旅行家』(1937)とを刊行した。最初の近代的ケンペル研究としてこれらは位置づけられている。もっとも、現在ではマイヤーの研究は批判的に言及されることも少なくない。一例を挙げれば、マイヤーの伝記で、ケンペルは明確な目的をもった、近代的な研究者の先駆けとして描出される。だが、新たに発見された資料はこうした英雄的なケンペル像は適切でないことを示唆している。ハーバラントによる伝記『レムゴから日本へ』(1990)は「英雄でもナショナリストでもない才能豊かな知識人」という新しいケンペル像を提示している。

ドイツには汗牛充棟のケンペル研究がある。とくに1950年代から70年代まで、ケンペルはペルシャとの関連で論じられることが多かった。これに加えて『ケンペルとシーボルト記念論集』(1966)以降、『ケンペルの「廻国奇観」—学問的革新、人文主義的学識、ネオ・ラテン語のレトリック』(2014)まで合計6冊の記念論集が出版された。この中には東洋学はもちろんのこと、植物学、医学、書誌学、言語学、地理学などさまざまな視点の論文が含まれている。その他の重要な研究としてハーバラントは次のものを挙げる。ヴォルフガング・ミヒェル「ケンペルの奇妙な『灸所鑑』」(1983)、ヨーゼフ・クライナー編『ドイツと日本 歴史的交流』(1984)、ベアトリス・ボダルト＝ベイリー「ケンペルの復活」(1988)、ペーター・カピツア『ケンペルとヨーロッパの啓蒙主義』(2001)、ロタール・ヴァイス『ケンペルの廻国奇観』(2012)。それぞれの題名が端的に示すごとくケンペル研究が扱う領域は広範かつ多様である。また、ハーバラントは論文「オラウス・ルドベックに宛てて旅の目的を記したケンペル書簡の再発見」(2010)で、ケンペルが当初、日本ではなく中国をみずからの旅の目的地としていたことを明らかにしている。

著作のリプリント、原典批判版そして翻訳の数々もドイツのケンペル研究を特徴づけている。なかでも原典批判版『ケンペル著作集』(2001-2004)は、最も重要な成果といえよう。しかし、残念なことにこの著作集にはケンペルのラテン語の主著『廻国奇観』は収録されていない。確かに同書のドイツ語訳やリプリントは、抄訳『ペルシャ皇帝の宮殿にて』(1940)を手始めとして、すでにたびたび出版されてはいる。だが、それらが抄訳であり、学問的精確さに欠ける部分があるという点で原典批判版が待望されている。その原典批判版はハーバラントを中心として進行中である。それはヴォルフエンビュッテルのアウグスト公図書館にデジタル版として一部公開されている。

ハーバラントの講演をもとにドイツのケンペル研究を概観してきた。ここから受ける印象としては遺稿の出版、原典批判版の整備、伝記的研究の充実である。これを基礎として多様な研究がなされており、日本は数多くの研究テーマのひとつである。そもそもケンペル自身にとっても当初の目的地は日本でなかったし、日本のみが生涯の研究対象だった訳でもない。彼はロシアを旅し、ペルシャの括目に値する記録を残し、インド、シャムを観察した。同時代の教養ある人々と書簡を交わし、知的なネットワークを作り上げた。この希代の旅行家の生涯を全体として視界に収めた研究が、日本におけるこれからの課題といえるかもしれない。もちろん先に述べたように日本のケンペル研究には独自の関心と蓄積がある。この点は正当に評価しなくてはならない。しかし同時に日本のケンペル研究そのものが鎖国的であってはならない。研究会「ケンペルの協働研究」を通過点として、今後のケンペル研究がさまざまな協働研究を通じていっそう開かれたものになることを願っている。



## 事務局より

### メールアドレスご登録のお願いとメーリングリストのご案内

日本18世紀学会では、会員の皆様のメールアドレス登録を進めています。それに基づくメーリングリストを介して、学会や研究会のお知らせ、ヴォルテール財団からの連絡などをメールによって会員の方々に迅速にお知らせすることができています。

また、日本18世紀学会の全会員は同時に国際18世紀学会に所属するため、日本18世紀学会に登録されたメールアドレスは同時に国際学会にも登録されます(公開はされません)。国際学会にメールアドレスが登録されますと、国際学会からの重要な連絡を直接受け取ることができます。この登録にとともに、各会員にはIDとパスワードが送られます。これを用いると、国際18世紀学会のサイトSIEDS-DIRECTに登録される会員情報にアクセスし、それを修正することができます。数年おきの国際学会の役員選挙の際も、このIDとパスワードがあれば、郵送によってではなく、インターネットを通して投票することができます。

ただ、未だに学会員の皆様のアドレス登録状況が十全とは言えない状況で、特に国際18世紀学会事務局からは日本18世紀学会のアドレス登録状況が(日本18世紀学会の会員数に比して)かなり低い水準にあるのを憂慮する声も寄せられています。

つきましては、学会事務のさらなる効率・簡便化だけでなく、国際学会での交流促進のためにも、2018年6月の総会で会員の皆様のメールアドレス登録を改めてお願いすることに決めました(日本18世紀学会はもとより国際18世紀学会でも会員メールアドレス管理は万全を期しております)。以下のいずれかに該当する方は、学会事務局にメールでご連絡ください。(メールアドレスは学会ニュース末尾に記載されています)。

- ・ メールアドレスをまだ登録されていない方
- ・ 登録を希望されたにもかかわらずメールをお受け取りになっていない方
- ・ 以前は配信されていたメーリングリストからの連絡が最近は届いていない方
- ・ 国際18世紀学会のサイトSIEDS-DIRECTの個人ページにアクセスしたがサイトからメールアドレス

ス未登録とされた方  
お手数ですが、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

### 『年報』への論文投稿について

すでにご存じと思いますが、大会での発表をもとにしたもの以外の論文も投稿できます。詳しくは同封の総会議事録に記載の投稿規程をご覧ください。（本年の総会にて内容を一部変更した新投稿規定が承認されています。）

### 投書欄について

この「学会ニュース」に投書をしていただくこともできます。たとえば以下のような内容の投書が可能です。

- ・ 学会や事務局への意見、提案、希望など。
- ・ 掲示板：研究会の呼びかけ、行事の広告、情報提供の依頼（たとえば「『〇〇』という本を探しています」など）。会員同士の連絡にご利用ください。

いずれも事務局までお申込み下さい。

チラシや案内文書を「学会ニュース」に同封することも可能です。年3回の発行なので緊急の案内には適しませんが、全会員にお届けできます。（経費等の都合上、枚数の少ないものに限りです。）

### 共通論題のテーマ、および書評対象図書

会員からの提案を随時受け付けています。事務局または担当幹事まで。（ただし、共通論題のテーマ決定に際しては開催校の希望が優先されるので、必ずしもすぐにご提案が実現するとは限りませんが、事務局から開催校や幹事会に伝達します。）

当学会は学際的な学会であるため、会員の研究が広範囲に及び、担当幹事だけでは各分野の重要文献の情報を集めるのが困難です。書評で取り上げるに値すると思われる図書がある場合、事務局までお知らせください。（特にご自分の専門分野が当学会で十分に扱われていないと思われる方は、積極的にご推薦ください。）

### 学会ニュースのエッセー

今のところ、事務局から執筆をお願いしていますが、会員の皆さんからの希望も受け付けています。執筆を希望される方は事務局までお知らせください。（編集の都合上、12月号は10月半ばまでに、4月号は2月初めまでに、9月号は7月半ば頃までにご希望をお寄せください。）

### 年会費

日本18世紀学会の年会費は5,000円です。年会費について証明をご希望の方は、『年報』末尾またはホームページの「会則及び役員選出に関する細則」附則の項を印刷してご利用ください。

### 献本

学会宛に以下の図書をいただきました。お礼申し上げます。

- ・ 鷲見洋一『一八世紀 近代の限界：ディドロとモーツァルト』（2018年7月、ぷねうま舎）
- ・ 坂本武編『ローレンス・スターンの世界』（2018年5月、関文社出版）

### 新入会員の方へ

毎年6月の幹事会で入会を承認された方はその年度からの会員となります。6月の幹事会以降に入会を申し込まれた方は12月の幹事会で承認され次年度からの会員扱いになりますので、会費の請求はあ

りませんが、他の会員同様に諸種の配布物をお届けいたします。

### 新会員の勧誘のお願い

ぜひ18世紀研究に関心のある方を本会にご勧誘ください。入会申込用紙は日本18世紀学会ホームページからダウンロードできますので、よろしくお願いたします。

幹事会メンバー（50音順）：出羽尚（ウェブ担当）、王寺賢太（国際学会執行委員）、大石和欣（大会担当）、隠岐さや香（国際幹事、広報担当）、小田部胤久（代表幹事）、川島慶子（ダイバーシティ担当）、桑島秀樹（年報編集担当）、小関武史（学会ニュース担当）、斉藤涉（大会担当）、坂本貴志（年報編集委員長）、武田将明（大会担当）、玉田敦子（年報編集担当、広報担当）、長尾伸一（韓国学会交流担当）、馬場朗（事務局長、会計担当）、逸見龍生（大会担当）

会計監査：井上櫻子、川村文重

事務局委員：山口沙絵子、杉野駿

日本18世紀学会ニュース 第88号 2018年9月発行

発行者 日本18世紀学会 代表者 小田部胤久

事務局 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学文学部美学芸術学研究室 日本18世紀学会事務局

e-mail: [jsecs@l.u-tokyo.ac.jp](mailto:jsecs@l.u-tokyo.ac.jp)

tel: 03-5841-3769

fax: 03-5841-8958

<http://www.gakkai.ac/jsecs/>